

●高澤良一 第八句集 随笑

●十月―十二月

小鳥来る樟は見通しよき樹にて

きな臭きものには倚らず木の葉髪

背高鴨ああか赤い鼻緒のじよじよ履いて

十夜講お婆の白河夜船かな

臍毛濃き運動会のお父さん

虫食いくわりんたうたう落ちてしまひけり

蠮螋の暢気な父さん歩きかな

日向好き枯蠮螋の妙好人

木瓜の実の道楽息子よく肥えて

火の見の下槍鶏頭の小火ありぬ

鱒刺の一撃をもてテロありぬ

かまつかの赫つとイスラム原理主義

かまつかや報道一ト日テロ一色

テロ続報二転三転鴟日和

弔旗垂れ雁来月はな端紐育

天高く法螺貝吹けりテロ退治

秋風にどんどんすすむテロと呆け

日蓮池上本門寺忌昼からお会式混める池上線

両の掌を湯呑みにぬくめ御命講

お会式の赫つと灯の入る妙見堂

風吹けば熾るがごとくお万灯

風吹けば風のいろ帯ぶお万灯

万灯の傘浮き上がり浮き上がり

お手綱のこよなき真白御命講

本門寺坂下に詰めお万灯

さきがけの万灯一つ橋渡り

万灯引く衆の白足袋白法被

団扇太鼓紺の腹掛けして搏てる

万灯の提灯持はご住職  
万灯引く法被に山号寺号かな  
池上の万灯の湧く星のそら  
万灯の花懐といふところ  
御命講芙蓉に洩れて医院の灯  
万灯に子を高々とてんぐるま  
うち過ぎぬ団扇太鼓の二波三波  
夜風出づ万灯いろの綿飴に  
家包の葛餅膝に池上線  
死してなほ墓に大小猛り鴟  
人騒の墓域に及ぶ御命講  
槨松本幸四郎の実のやたら打つ墓高麗屋  
雷蔵の墓を袈裟切り鴟のこゑ  
小鳥来て中村八大ねむる墓  
墓のうへ鴟が唄ふぞ田谷力三  
墓所に降る木の実を聴いて露伴・あや文  
木を離る木の葉くらしと露伴墓  
櫻もみぢあや一片文の閑伽水に  
二階鎌倉大巧寺にて謡ひの稽古石露日和  
陶器めく郁子に紫一寸入る  
杜鵑草手にし座興に啼かせみぬ  
お会式本覚寺の触れ書き杉の板塀に  
梅檀妙本寺の実のまだ青き寺に寄る  
山門常栄寺下自然薯掘の自転車か  
萩優るぼたもち寺の植込は  
ぼたもち寺寺門の萩に乱れなし  
蜘蛛安養院の糸端を宝篋印塔に  
庭石に二つ茗荷の忘れ物  
十夜寺光明寺そこと聞きゆく日暮道  
鎌倉の波おとなしき十夜かな

十夜法要堂を破らんばかりの鉦  
堂抜いて心耳を洗ふ十夜鉦  
十夜講凡夫に交り尼ごぜも  
十夜講畳を擦りて坐につける  
十夜僧肅と引声阿弥陀経  
十夜法要囃す鉦方念仏ねぶつ方  
堂上に車椅子上げ十夜講  
婆の眼をこすりこすりつ十夜講  
藜の木の太くて立派十夜寺  
潮の香す十夜参りの戻りみち  
締まりなき一日鴟も聴かず暮れ  
定年は鰐の退屈地でゆく秋  
尾のごときものが一閃鴟なるや  
片づけてはならぬ机の物に秋日  
屑籠は大き程よし露の家  
郁子は実にこの家の主見たこと無し  
この家には犬が居る筈枇杷の花  
石榴より硬き頭のテロリスト  
そぞろ寒誘へるものに秒針音  
人臭きくわりんの匂ひ掌に移り  
これ以上裂けやうもなき石榴描く  
初鴟のこゑ近隣を巡りをり  
鷹化して鳩となるとは莫迦げたる  
いちじくは子供に還り食うぶもの  
鴟切なし雨止む気配さらさら無く  
さざんかのはや花零す粗忽者  
濡るる身を固く引締め雨の鴟  
徒食の身ぶらぶら石榴にも似たり  
見る者をつつみ込むいろ芙蓉咲く  
朝な朝な鴟に親しみ机拭く

虫の夜といふには虫を知らずに来し

鴉悼 飯島晴子にして殉ずるころ大いにあり

秋風をこんな呼吸で詠めと逝く

先手とる気概を鴉に呼び醒まされ

片岡球子画業八十年 片岡球子展ドカンと冠雪富士を置く

酷評に怯まぬ錦秋球子富士

自然薯三浦晴子さんより自然薯を賜るなりの偏屈を押し通す形

一家言あるべし山芋掘りとして

自然薯のそれと知らるる長包み

念の入る自然薯の荷を解くとせん

自然薯とおもふ荷ほどこき面白く

自然薯の荷を解くここをかうやって

自然薯の包み開けば土の香す

髯づらの自然薯えみし蝦夷の顔したり

自然生じねんじょう背筋一本通りたる

根性の据はり方見ゆ山の芋

何で臍曲げてしもうた山の芋

自然薯のかうなるまでの紆余曲折

自然薯の汝ならではのねぢれやう

自然薯の異形は美味の証にて

自然薯の髯蓄ふは富貴の出

ひようひようと風のごと来て自然薯掘る

石路日和とところでこれから何處へ行こ

日々鈍る足を鍛えにどんぐり山

むかご落つ人目届かぬ所かな

この方が面白さうな蓼咲く路

花野行さよなら三角また来て四角

茶のベスト着込み鴨見と洒落込まむ

にんにくと煙草の話文化の日

鴨池を発たんとやっさもっさして

鴟努力論よりもハキハキともの言えよ君

鴟努力論日和ルビを頼りに露伴読む

濁り酒入っていますか酒屋さん

自転車フウが踏みつけゆきぬ楓落葉

爛熱妻し当節流行らぬこと云ふな

検査結果遊走腎とは菊の花

アフガンにテロ前庭にサルビア咲く

けん玉の腰を屈めて冬に入る

うまの合ふ夫婦となりてとろろ飯

すぐ人のせいにする癡猛り鴟

啜るたび爺むさくなるとろろ飯

新牛蒡どちの雑談牛蒡語で

横たはる様は涅槃じねんじょうの自然生

全館逗子市役所を覆ふに足らぬ蔦紅葉

朝寒やまたあべこべに肌着着て

ほくと零余子噛めば中年過ぎてをり

義理欠くまま十一月のこゑをきく

けふひどく冷え込み鴟の畳み啼き

岩山北伝酒水の滝ひしゃらんしゃらんと女滝落つ

奔放は滝の放てる音にこそ

捌けたる人のごとくに芒枯れ

秋草の長きは長く摘み揃え

秋草を摘める長短取り混ぜて

これ煮れば冬が近づく焼豆腐

自然薯搗る妻は大佛坐りして

この彩に安んじ梅の紅葉せり

つまらなき色して梅のみぢ葉は

柿の木のへうへうと彳つ枯れて彳つ

師走円覚寺てふ物入り月が目の前に

夕鴟お風入れのこゑの一撃さざんかに

三十棒鴟も喰らへり坐禅堂  
宸筆もものは紙魚の確信犯  
禅林の冬雲動く潦  
打ちつけてめりこむ魚板紅葉寺  
坐禅堂上を肅々冬の雲  
方丈を大きく使ひお風入れ  
お風入れ丸山応挙は虎が得手  
風入れの絵図の地獄の責め道具  
眼鏡拭き浄めて拝観文化の日  
山麓駅造花紅葉も酣に  
ぼけ封じ秩父八番札所 西膳寺三尊に山もみづるよ  
やあ紅葉八番札所のぼっくりさん  
ぼけ封じ御婦人肌着購ふ紅葉寺  
おびんづるさまに前山紅葉して  
木の実降るぼっくりさんの寺日向  
首筋の辺りがすうと冬立つ日  
人の言気にしてゐては木の葉髪  
かう雨が続けば鴟もつらからう  
アナウンサーけふ立冬と前置きし  
自選とは由々し朝鴟けたたまし  
中年には中年の冬服のいろ  
酉の市すれ違ひざま脂粉の香  
お手頃の熊手は店のとっつきに  
熊手買う人を立見の人の群れ  
みなとみらい二丁目で見ると冬の虹  
龍の玉ここはどっこい正念場  
強くなる雨にたまらず鴟去れり  
鋤焼がご馳走世代玉子割る  
花八つ手気安く詠めて貧乏性  
冷え込みのかう強ければ鴟も来ず

皺む柚子若年寄といふ風情  
子規の口吻虚子の瞑目秋の暮  
御三方大根の清さん水の流れ見て  
へい乗さんは椿落つるを篤と見て  
のほ升さんは別格柿の味も亦  
ぐんと冷え今日着るものに大わらは  
色鳥来これだけ森のもみづれば  
三世代みんなめかして七五三  
文鎮の鼻の貌夜も更けた  
心電図厚着を脱いで楽にして  
患者皆着膨れ病院狭くする  
稍寒の投函の音聞いて去る  
冬浅き畳にひろぐ肌着類  
町内の紅葉処を一巡り  
落葉搔石畳より手をつけむ  
縣廳前馳すバス銀杏黄葉いろ  
公務員銀杏落葉を踏みしめゆく  
あて貴人のごとく桂の黄葉みる  
遣り残すことがいつしか溜りて冬  
極月の趣常の日差しさえ  
薄塩に定年過ぎのピーナッツ  
短日のバスのおでこが見えて来ぬ  
麵麩抱えゆく本牧の日短か  
改めて妻の冷え性花八つ手  
桜落葉して界限を錆びつかす  
こどもまりした家ばかり冬珊瑚  
庭先に剣襖の葉水仙  
妻もまた気がついてをり冬ざくら  
一団の鴨を脇見の鴨一団  
水鳥の幽紋あたり暮れかかる

夜の落葉ヘッドライトをよぎり消ゆ  
錆止めをあかあか塗りて年用意  
皆楓落葉紛るゝものの無し  
同型の楓紅葉の全しや  
落葉掃くことめんだうな目つきして  
冬兆すスパゲッティに鷹の爪  
十二月八日の薄きおみおつけ  
閑日に馴れ親しみて冬珊瑚  
冬来ると櫂の聰明櫂ドクの鈍  
日向ぼこするにも何處か気の引けて  
無駄骨をおる事嫌ひ木の葉髪  
お手本と云へれば云へる牡蠣の意地  
大根台地三浦岬 城ヶ島葉っぱが眩し眩しとも  
流木に冬麗の砂零しみぬ  
五百椿林寒潮音を断ち  
島の鳶こゑ逆落とし篠枯らす  
水仙の避けやうもなき潮飛沫  
磯菊の汐傷みして黄の名残  
煤掃了ゆ不服と云へば本の位置  
暈けて映る写真眺めて冬籠  
やれやれと云うてまた年送りけり  
小春日に大滝秀治の話術冴え  
忘年会妻にはありて吾になし  
蓑虫の蓑温めぬし日の陰る  
柿の蒂町内の空つながれり  
お歳暮に庄助さんの國の酒  
年の瀬は露天湯なんぞ願はくば  
夜の鴨に騒ぞめきのありぬ納りぬ  
炊事了へ一息つけり蜜柑のまへ  
蜜柑置きよいしよと妻の割り込める



煤の日の片づけ本の拾ひ読み  
膝小僧冷えて来たれば酒支度  
熱爛もここまでといふ自覚あり  
水鳥の羽搏ちごたへのある寒暮  
水鳥の睡りに徹す直心<sup>ひたごころ</sup>  
裸木の無心が心憎き日や  
蠮螋に横を向かれてしまひけり  
冬銀河何處ぞとあふぐ千鳥足  
初お目見え天気予報の雪だるま  
おのづから一団を為し鴨すすむ  
鴨群るゝ日向つづきに家鴨ゐて  
鳩人を面白さうに見る  
がやがやと鴨ゐて池を凍らせず  
松立てゝひとり眩くこれでよし  
宿木を見つけしこゑの高弾み  
柿の蒂つまらなさうに日を浴みて  
柿の蒂夕日外れてしまひけり  
正月花抱え女の声掛けゆく  
年の瀬の散髪待つ間の漫画本  
蓬髪に分け方問はる木の葉髪  
年の瀬の裏番組も鍋料理  
白菜干す御天道様に尻向けて  
日向ぼこ猫に去られてしまひけり  
寒八ツ目吸ひ付くものを選ばざり  
鋤焼を漁り尽くして鍋残る  
今宵煮るべし国光といふ林檎<sup>聖夜</sup>  
鏡なす空に枯木の物狂ひ  
ガサ市のけふを強気に吹く風よ  
喜多方ラーメンずすと啜れば北風ひゅう  
脱帽といふ他はなき枯木瘤

木の葉髪とどのつまりは年経たり  
出番なき古事類苑の煤払ひ  
力みなき冬の櫂と見てイてる  
ぎくしゃくとしたまま年を越しにけり  
裸木の走り根の先ここまでよ  
とんでもなき縞梟の胸の内  
冬そうび虚空を統べて気韻さへ  
冬至湯の湯気まうまうを纏ひ出づ  
冬至風呂上面うめたぐらいでは  
河内山宗俊もどきが年の湯に  
目の粗き脱衣籠年詰りたり  
締切日大つごもりと別にあり  
ぶつつける力が余り寒玉子  
年の瀬テロ元年の何と云つても紐育  
松隆と樟隆々と十二月  
一茶忌の小遣い少なくなりにけり  
自転車のベルに追い立てられ師走  
この黝きをねずみの糞とはよう云ふた  
葛湯溶き年金ぐらし長丁場  
数え日の小遣いはたき買へる本  
数え日の蓬莱島に亀眠り  
数え日をタイムスリップして邦画  
数え日の力が入る硝子拭  
数え日の猫も私も日をよるべ  
数え日の日の入る部屋で耳掃除  
師走妻算盤はじく眼をしたり  
これは観たことある映画煤籠  
茶碗蒸し腹に行火を入るごと  
手のこんだ咲き方をする蟹さぼてん  
怖れ入る君の一言爛熱し

人職引いてごとの御用納の日となれり  
夫婦して磨く玻璃戸の年の塵  
煤の日の妻の届かぬところを拭く  
年の瀬下田稔さんの黄泉にも句会あるならむ  
俳句莫迦通す一年亦過ぎて  
浄闇に年の火爆ぜぬたて続け  
逝く年の背をとんと突き鐘一打  
湯豆腐に微塵の脂泛きにけり  
下履きをバタンと冬至の湯屋を出づ  
蓮根の連れ子つぎつぎ現はるゝ  
ビーフシチュー煮詰めておいて煤払  
鮫鯨の強つくばりの口許よ  
鼻風邪を引いてずぼらな仕事ぶり  
釜茹での蝦蛄に夕映始まれり  
黄粉餅喰ふたる顔の撫で掃除  
花八つ手晦日払ひの世のはるか  
顔立てゝ鼻勿体ぶった様  
御勝手にお唄ひなされ年忘  
夜神楽や些細なことを大仰に  
し残したこと年越してやればよい  
ややこしきは皆先送り年逝かす  
さういった訳で胡蘿蔔喰はぬ訳  
煮凝の半信半疑鯉の目  
ぜいたくなもんや火鉢が懐しき  
目端利く冬の鴟とはなりゐたり  
一茶忌の福神漬を噛み鳴らし  
一円玉邪険にされて十二月  
短日のぬいぐるみ置く心臓外科  
日溜りの布団のやうにうちとけて  
鼻を師とせるおもひなくもがな

梟にはぐらかされて帰るのみ  
凍みに凍む虚空蔵さんのどぜう髯  
日向ぼこめく一年がもう仕舞  
ばうとして昼の焚火にあたりゐる  
干布団日和や吾の出番あり  
日はあらぬ方へ布団の蒼ざめる  
出あいしがしら朝の冷え込み口にする  
干布団広げて夫婦二人分  
布団皺直して布団干せる妻  
家内うちよりこゑそこらの布団取り込めと  
布団取り込むは一ト日を蔵ふごと  
蓮根の穴のあなたに黄泉路見ゆ  
花八懐旧つ手敵の母艦が潜む庭  
唐突に冬の日暮れて犀の尻  
手をこすりつゝ云ふ暖房入れやうか  
手をやれば柿のつめたさ椅子の肘  
風邪引いてだうにもならない頭です  
鼻風邪を紛らすための根こん仕事  
鼻風邪にだうだう巡りの考えごと  
弔ひに落葉臭さを持ち込みぬ  
柊や人を評すに言葉揺れ  
落葉搔櫂大樹にとりかかる  
落葉搔櫂の根っこをガリガリと  
冬青草根金沢文庫 称名寺旧伽藍発掘調査こそぎにして発掘溝  
飽食は冬の蠅にもヤツと発つ  
その内が来年となり大つごもり  
生前の話となりて桜鍋  
煤逃げも小遣銭でゆける処  
日向ぼこ年内といふ柵の内  
この年を締めくくる顔吾もしたり

いま暮れて今年が終る枯木星